

人であったが、もし生きていたら是が非でも再会したいと思う唯一のソ連人である。

シベリア抑留見聞記

神奈川県 香坂 毅

昭和二十年九月二十八日早朝、マンドリン小銃を肩から掛けたソ連カンボーイの引率で、南満州補給廠文官屯九二八部隊を出発する。高粱畑と真桑瓜畑に挟まれた農道をしばし行くと、集落と思われる樹々の密集したその中に学校風造りの建物があり、校庭のような大広場には既に他の部隊から大勢の日本兵が屯していた。ここが我々を連行すべき応急用の集結地、北陵収容所だった。

程なくして、恰幅のよいソ連将校が通訳を伴い中央に設けられた壇上に上り、今後の輸送計画について説明があった。

「あなた達はもうすぐ日本に帰れます。満州よりウ

ラジオストックを経て船で日本に行きます」。騒然としていた広場も、ソ連将校の漠然とした説明であったが、いずれにしても日本に帰れるのだという内容に不安で動揺していた気持ちから冷静さを取り戻す。出発の号令を合図に、満人らしき案内人を先頭に隊列の前方から静かな足取りで動き始める。

変哲もない道幅の狭い殺風景な農道を、十九歳で満州の地に赴き、清原での家族との別れ、入隊後初めて外出した時の肥溜め騒動、日本への逃亡の事など様々な出来事を思い浮かべ、足元を見つめながら黙々と歩き続けた。どの位の時間が過ぎただろうか、やっと有蓋貨車が停車している駅構外と思われる所に着く。満人の苦力が日なたぼっこしながら雑談していた。古年兵の一人がここは何という所か尋ねると、面倒くさそうに皇姑屯だと教えてくれた。我々を遠きシベリアの大地に輸送するための、まさに始発駅だったのだ。ソ連側よりの伝達はすべて、我々の逃じ、暴動を恐れてか、ヤボンスキー・サルダート（日本兵）東京ダモイと偽り続け、その実は、当初より我々を軍事捕虜とし

て沿海地方をはじめシベリア、中央アジア等へ強制抑留し、ドイツとの戦争で失われた労働力を確保するための工作だったのだと思う。

日ソ不可侵条約を一方的に破棄して満州に侵入、戦後は、日本に帰国させると虚偽連行。このようなソ連の不条理な政策により、二年有余にわたる抑留生活が始まる。

皇姑屯駅より家畜同然の扱いで有蓋貨車に詰め込まれ、扉はカンボーイ（監視兵）により外から施錠され、給食給水時以外は開く事がなかった。途中何十回となく停車を繰り返しながら、満州最終地黒河に約一カ月後の十月二十六日到着する。ここにて二日間露営、二日間は日本陸軍の官舎に宿泊し、終日、大豆、高粱、砂糖等の船積み作業をする。体力のない私は、自分の体重の倍近い量の入った麻袋を担がなくてはならず、重労働だった。

十月三十日、いよいよ満州の地を離れアムール河（黒龍江）を渡河、対岸の街ブラゴエシチェンスクの土を踏む。見馴れぬ異国人が来たとなれば当然かも知

れないが、物珍しさと物乞いをする群衆で騒然としていた。中には、ヤポンスキー・サルダート（日本兵）腹切、武士（さむらい）と、切腹する真似をしながら興味あり気にワイワイ騒いでいた。日本も戦争末期には物資不足で不自由していたが、ソ連も独ソ戦争で日本より更に困窮していたのだろうと、着衣のみすぼらしい身なりを目の当たりにし容易に想像することが出来た。

人員の確認が終わると、早速露営地まで木材、有刺鉄線の運搬作業を終日三回行い露営する。翌三十一日は早朝よりあいにくの小雪舞う寒い日だった。カンボーイの引率にてブラゴエシチェンスクの駅に向かう。途中、皇姑屯出発の折のソ連将校の輸送計画の言葉が何回となく脳裏に浮かび、帰国してからの情景など思いながら歩いた。昼食後、カンボーイの有蓋貨車乗車命令にもむしろ積極的に乗り込む。三時間程してカンボーイにより扉が閉じられ施錠される。日本に帰すのに何故わざわざ施錠するのかちょっと不審に思ったが、別に深くは考えなかった。空気も遮断されたよ

うな息苦しい貨車の中だが、じっと我慢する。

乗車後しばらくすると、薄暗かった車内も眼が慣れ隅々まで分かるようになる。横になり仮寝している人、隣の人と小声で話している人、雑のうの中身を取り出して整理に余念のない人、東京ダモイに備えて、人それぞれだ。換気孔より僅かに差し込んでいた光も次第に変化し、車内もすっかり暗くなる。まだ走り出さないのかと心待ちにしていると、連結器のガタンガタンと引つ張られる音がして走り出す。

いよいよこの次の下車駅はウラジオストクか、帰国のことを念じ横になっているのだが、走って止まり、また走っては止まるの繰り返し。とても熟睡出来る状態ではないまま夜明けを迎える。翌朝、古年兵の一人が、自分の水筒のキャップを指差し「この磁石だと貨車は完全に北上しているぞ、我々は騙されたんだ」とわめき出したので、今迄寝ていた人達が起き出し、蜂の巣をつつ突いたような騒ぎとなる。一瞬にして望郷の念を打ち砕かれたダメージの大きさに、車内はソ連の埋不尽な暴挙に対し罵りが容赦なく飛び交う。しか

し今となつては籠の中の鳥、無念ながら諦めるより仕方がなかった。

走れば走るほど日本より遠ざかるシベリア鉄道の日々は、もう夢も希望もない理性喪失へと変化してしまった。生かさず殺さずといった程度の食糧が配給され、僅かな食事の後は横たわるだけの非人間的な生活の日々、貨車が停車するのは、給食給水と、このごく僅かな時間を利用しての排泄時間だけだった。お互いに短時間で用を済まさなければならぬので、貨車から降りると運動会さながら一斉に雪原に駆け出し、場所探しに奔走した。それは、我々より先に輸送された日本人の用便で足の踏み場もない有様、適当な所がなかなか見つからずモタモタしていると、カンポイにダワイダワイ、ヴィストレ（早くしろ）と急がされ、用便すら落ちて出て出来なかった。何から何まで束縛されての貨車生活も十日程経ち、体力は段々目に見えて衰えてくるし、焦りから半暴自棄になっていた。

十一月のシベリアは無情にも、体力のない我々には僅かな隙間からの冷気も骨身にしみて辛く、お互いに

体を寄せ合い、毛布を頭から被り芋虫のような格好で寒さを凌ぐ。車内に無数に打たれた鉄の鋌が我々の吐く息で真っ白に凍り付き、寒さを更に感じさせた。会話は途絶えがちの日々、扉の側の人が無らしい景色が見えると皆に伝えた。まるで自分達の位置すら分らない車中の会話。「多分バイカル湖だよ。事によると我々はモスクワに連れて行かれるのかな」と年配の人が呟いた。「いや、海ではないのか」と他の人が反論した。何しろ僅かな隙間からの一部分で判断するのだから色々憶測が飛び交う。このような会話により多少なりとも気が晴れた。

今まで専ら原野での用便も、この辺りから仮設の便所小屋があつた。日本式の造作と違い、もちろんドアもなければ仕切りもない。厚い一枚板に丸く穴が横一列に開けられたもので、通路を挟んで両者向かい合つて用を足す構造になつていた。ここでも我々より先着の日本人による排泄物が丸く開けられた穴の上までピラミッド状に突き出ている、肝心の用を足すことが即座に出来なかつた。便所には予めローム（鉄棒）が用

意されていて、用を足す前に一仕事、ロームで穴の上突き出ている排泄物を欠き砕き、はじめて用を済ますことが出来た。

太陽は西に東に回り、どちらの方向を目指して走っているのか全く分からない。ブラゴエンチンスクを出発してから十七日目の十一月十六日朝、全く人家の見当たらない雪原の僻地に停車する。ソ連輸送計画の目的地なのか。カンボイにより扉が開けられ、全員下車し、人員確認がなされ、ソ連ゲーペーウー（内務人民部）将校の指揮下への引き渡しが行われ、ソビエト連邦カザフ共和国テケリ第四十地区第八収容所に抑留される。

山の斜面を利用して、兵舎風の平屋建てが三段、道に平行して数棟並んでいた。丸太を組み合わせた上に粘土を塗り込め、石灰のようなもので吹き付けたお粗末な宿舎だった。収容所の周囲は有刺鉄線が高く張り巡らされ、隅々には望楼があり、既に監視兵の姿が見えた。宿舎内は土間で、蚕棚のような二段になった寝台が左右に通路を挟んで数列並んでおり、藁布団と毛

布が一枚ずつ置かれていた。勿論電灯はなく照明はランプで、それも三メートルぐらいの間隔で配置されていた。窓という窓はなく、宿舍内は常時薄暗く日が暮れば眠るしかなかった。

最初の二、三日は雪掻きが主な仕事で、この合間を利用してソ連軍医による体力判定検査が実施された。

検査はごく簡単なもので、上半身裸になり、軍医が腹の肉をつかみ、肉付きの良し悪し、弾力性の有無によって即座に等級が分類された。一級から三級、更にオカと区分され、一、二級は重労働、三級は軽労働、オカは病弱者として構外作業は免除された。私は体格が悪くやせっぽちで検査結果は三級（軽労働）だったので、ノルマ（割当基準量）が低く作業は辛くなかったが、その代わり食事が少なく、空腹の日々が続き閉口した。

入所三カ月を過ぎた頃より栄養失調による病人が続き、死に至る者が出始める。食糧事情による不満の声が日々高まり、日本の上層部からも抗議する空気が流れ始める。ソ連側も毎日多くの患者が医務室に訪れ

ているので実情は充分承知しているだろうに、一向に改善されなかった。お互いに何とか自分の体力を保持するため、満州より大事に持って来た石鹼、下着類、晒木綿、時計、万年筆、手袋、靴下、手拭等、交換出来る品物は、物々交換にて総て黒パンに化けてしまった。

入所以来数カ月経った初春、突然、ソ連側よりダモイ（帰国）者の発表があった。今回のダモイ対象者は老人、オカ、三級、年少者という事で、私は三級の年少者のため、皆より一足先に帰る事になる。守衛所の門前には数台のトラックが駐車しており、カンボーイの「ダワイ、ヴィストレ」の声に急ぎ立てられ一瞬のうちそれぞれトラックに分乗し、テケリ第四十地区第八收容所を後に祖国日本への帰途につく群れの顔には、帰国を信じての幸福感に満ち溢れた笑顔があった。カンボーイの人員確認の後、待機していた四十数車輛の貨車に乗車するよう指示が出る。貨車の一部には既に他地区からの日本人が乗車していて、我々はどこから来たのか呼び掛けていたが、カンボーイの制止

で会話が出来なかった。毎度の事ながら急がせて乗車させ、数時間、一向に動く気配がない。満州文官屯以來、なぜか決まって夜にならないと走り出さない。皆心得たもので、横になり仮眠をとる。

貨車はどの位の距離を走ったのだろうか、走ったり止まったりの変り返りの繰り返す。完全に停車したのは翌朝だった。カンボイの騒々しい声と扉の施錠を外す音がし、下車命令が出る。たった半日の輸送で下車させ、一体我々をどこへ連れていくつもりなのか、何を考へての行動なのか理解に苦しむ輸送に、嫌な予感がした。何回となく繰り返されるカンボイの人員確認が終わると、ゲーペーウーの将校からの訓話があった。「諸君はこの先日本までの長い距離の輸送には体力的に到底耐える事が至難であると上層部の方で検討の結果判断されたので、途中下車をしてもらった。ひとまず休養かたがた体力の増強を図り、元気な健康状態で日本へ引き渡す責務があるので、短期間軽い労働に従事してもらおう事になった」と、一瞬我が耳を疑った。かくして昭和二十一年四月、カザフ共和国

アルマアタ第五収容所に抑留されることとなる。

入所に当たり、守衛所の下士官クラス数人により人員確認が行われる。厳格なのか、計算が不得意なのか、折角五列縦隊になっているのに、一人一人の体を舐りながらアジン、ドア、トリーと気長に数えているうちに途中で気が散るのか分からなくなり、また最初からやり直しの繰り返す。完全に人員の掌握が済むまで信じられない時間を要した。やれやれ、これで終わったかと思えば、次は携帯品の検査が入念に行われた。どのように教育されたのか、ブラゴエンチェンスク上陸の時も「日本人腹切り、武士、何をするか不可解な恐ろしい民族だ」と口々に言っていた事を考え合わせると至極当然のことだが、二人の下士官が時間を充分かけて嚴重にチェックし、守衛所を通過するまでうんざりするほど時間がかかった。

収容所内には大勢の日本人と少数のゲルマン人が抑留されていた。宿舎内は木造の三段式寝台が通路を挟んで向かい合い、数列長々と並び、その中央にベチカがあるだけの簡単な造作だが、収容所内には医務室、

入浴場、電気設備、便所、営倉、食堂があり、テケリ当時のランブ生活、バーニヤ（浴場）に行くのに吹雪の雪道を一キロ以上も歩き一時間以上も吹雪の中で待たされた入浴事情を思えば、環境設備をはじめ、正に総てが天国と地獄ほどの大きな差があった。

テケリ収容所より来た者のうち、オカ（病弱者）を除いた殆どはキルピーチ（煉瓦）工場に配置され、私もここで働く事となる。工場までは殆ど人家はなく、出舎道を一キロ程歩いた山麓の閑散とした場所にあった。周囲は有刺鉄線が張られていたが、形式的なもので重圧感は全くなかった。工場内には、カザフ人は勿論、ウズベク人、キルギス人、タジク人が多く、ウクライナ人だという人も働いていた。人種差別はなく、性格は明るく陽気で屈託がなく、すぐに仲間となる事が出来た。日本の事を根掘り葉掘り興味深げに聞きたがった。ソ連の女性は押しなべて歌が好きで、タツプダンスをしながらよくカチューシャを歌ってくれた。我々は興味本位で歌詞を覚えようとするのだが、原語が難しく出来ないでいると面倒がらず何回でも繰り返

して教えてくれ、続きはザーフトラ（明日）と明るい笑顔を残して各職場へ戻って行く。ほんの昼休みの一時だが、女性達と過ごした親しみが、後日、労苦の中の楽しい思い出として甦る。

キルピーチ工場のノルマは体力のあるソ連人を基準にしたのか敵しく、毎日ダワイ、ダワイの叱咤に明け暮れた。当時、異常な建築ラッシュで供給が間に合わず、煉瓦窯出しの日は、まだ熱い煉瓦をトラックに直接積み建築現場へ直行、目の回る労働をしても百%のノルマは達成出来ず、朝夕二回で二百グラムの黒パンを得るのは大変だった。技術者の能力を高く評価していたソ連では、我々肉体労働者とは雲泥の差があった。

毎月貼り出される棒グラフを眺め、黒パンの厚さが目に浮かぶ。所詮空腹を免れないので、色々対策を考え実行に移した。まずは、食事の時間帯を技術者より遅らせる方法。これは大釜で作るスープの中身が沈殿するのを待ち、濃いスープ、具の入りで満腹感を補った。人によっては食器となる飯盒の蓋の底の部分

を叩いて膨らませ、余計に分量が入るようにしている者もいた。収容所生活の中で一番の楽しみは食べる事と寝る事だったが、その双方共にままならなかった。

食べる方は敵しいノルマに縛られ、寝る方はクルーブ（南京虫）とシラミに終始攻め立てられた。宿舍内の温度は常時十七度に維持するよう定められていた。

本来ならば快眠をとれるところだが、ベチカのある建物は皮肉にも南京虫にとっても最適な温度、絶好な越冬環境だったのだ。別に南京虫によって直接死に至る事はないのだが、睡眠不足や精神的苦痛に悩まされ、

正に呪うべき存在だった。私達数人の仲間には、天気の良い日は寝台より藁布団と毛布を屋外へ持ち出し、夜空に輝く星座を眺めながら、お互いに郷里のさまざまな話をしながら就寝するのが夏の夜の日課だった。南京虫と共に厄介な存在だったのがシラミだった。シラミの習性は喰いついたまま離れないので容易に潰せ、南京虫と違いうつぶんを晴らす事が出来た。

ソ連側は、過去第一次世界大戦でチフスが流行し多くの死者を出したことに鑑み、一週間に一度くらい

の割合で入浴があった。本来の入浴目的はシラミ退治であり、浴場に入る前に身に着けている下着、衣服総てを脱ぎ、殺菌室のS字金具に吊るし火力による高温殺菌消毒を一時間する。この間を利用しての入浴だが、日本のように浴槽に体を肩まで浸かり心身共にリラックスするような入浴法でなく、手桶二杯分の湯券が渡され、殺菌消毒が終わるまで上手に使わなければならなかった。夏は特に問題はないが、冬場の寒い日は裸で待たなければならぬので、乾布摩擦などして風邪を引かぬよう心掛けた。

昭和二十二年になると収容所内の民主化運動も活発となり、壁新聞が発刊され定期的に食堂に貼られ、今まで全く外部と遮断され井の中の蛙的存在だった我々にも幾分情報が入るようになり、帰国に対して多少か悲観的な考えだった気持ちに光明が差し、故郷の話題が多くなる。ソ連の新聞プラウダが日本兵の帰国について報じ始め、ダモイの噂もだんだんと真実味を帯びて来た。

今まで何回となく裏切られ信じる事を忘れていた

我々も、確かなる報道として受け止めた。シベリアの冬の訪れは、短い夏が過ぎると秋を通り越し十月初旬頃より冷たい風と変わり、時折小雪の舞う陽気となる。ああ、また冬將軍がやって来たか、誰しも心の中で一抹の絶望感を味わう淋しい季節であった。それは、ソ連の輸送計画から判断して、その年のダモイが終わった事を意味するものだと考えていたからだ。カンボイイから来年春頃ヤボンスキー・サルダート、東京ダモイの話が流れる。何となく一日一日が希望を持てるように気持ちが変わる。

数日後の日曜日の朝、俘虜用郵便葉書が各人に二枚宛配付された。今まで故郷と全く通信なかったので書きたい事が山積みしていたが、条件が付いていた。文面の内容は、現在無事で過ごしている事、家族の安否、の二点に指示。文章は総てカタカナで書き、時候、環境、地理的な事柄は一切駄目との事。この指示に従わないと検閲に引っ掛かり没収される、と説明があった。二度とないチャンスかも知れないので、条件にかかった次の通信文を書いた。「タイヘンゴブサタ

イタシマシタ。タケシ、ゲンキデマイニチスゴシテオリマスユエ、ゴアンシンクダサイ。ミナサンタチモゲンキデイルコトオモイマス。カラダヲダイジニ。デワゴキゲンヨウ」と、電報のような短い文章だが、無事である事だけでも伝えられて満足だった。間もなくシベリアで迎える三度目の正月、食事を済ませた先口の人達が「今日は米のご飯だぞ」「早く行って来いよ」と言葉を掛けてくれたので、友と一緒に出掛ける。飯盒の蓋一杯のご飯だが、入ソ以来口にした事がなかった。ゆっくり時間をかけて味わった。

昭和二十三年メーデーの日、カンボイイから全員に非常召集がかかり、何事だろうと広場に集まる。広場には既に、ラーゲリでは見馴れない正装をした威厳のあるゲーペーウーと思われる将校と所長をはじめ、十数人のカンボイイの並列している姿があった。通訳より紹介を受けたゲーペーウーの将校は、足早に中央に設けられた壇上に上り、弾むような声で演説した。

ロシア語を理解出来ない我々に傍らの通訳が大きな声で説明した。「諸君と共に記念すべきメーデーを祝

う事の出来る日、図らずも当局からの達しにより、五月七日、諸君はこのラーゲリ（収容所）を去る事になる」と一氣に話すと、ニコニコと満面に笑みをたたえ、両手を振りながら壇上を後にした。次の瞬間、広場は騒然と化した。誰彼なしに手を取り握手する者、抱き合って喜ぶ者、感涙に咽ぶ者、その反応は様々だった。夢にまで見続け、ひとときたりとも忘れた事のなかったダモイが現実となった突然の朗報に、感激を全身で表していた。シベリア抑留生活最後のメーデーは、臉の底、胸の奥深く強く焼き付いて離れなかった。かくしてヤポンスキー・ダモイ（日本人婦国）の確実の知らせがゲーベールウーの將校によって劇的に演出された。思えば最初に覚えた言葉がダモイだった。ダモイ、ダモイに明け暮れた二年有半、ひたすら奴隸のように過ごして来た歲月、お互いにダモイのために不条理な事も耐えに耐え忍んで来た数々の思いが走馬灯のように頭の中を駆け巡り、感無量に浸った。

いよいよ第五収容所を去る日、どこから話が流れた

のか、守衛所門外には大勢の民間人が遠巻きに集まっていた。所長をはじめ守衛所の人、カンボーイ達が見送りのため勢ぞろいし対面、抑留者を代表して責任者が「パリシヨイ・スパシーボ（ありがとう）、ダスビダニヤ（さようなら）」と別れの挨拶をした。出発の号令を合図に五列縦隊の先頭が歩き出した。二度と来る事のないだろう地への別れの瞬間、二年前入所した時のような悲壮感はなかった。道端に並んでいた婦人や子供達のヤポンスキー・ダスビダニヤ（日本人さようなら）の可愛い声が耳に飛び込んできた。また無心に手を振る少女の姿が深く印象に残った。

アルマアタ駅出発以来、毎日変哲もない貨車生活の一週間目（五月十四日）、入浴のためイルクーツクに下車する。五月中旬なのに粉雪が舞う寒さ、思わず防寒帽の垂れを下ろす。一夜明け、新鮮な空気の入替えのため扉を僅かに開けると、相変わらず雪が降っており、樹々は白い粉を吹き付けたように白く覆われ、何となくクリスマスツリーを想わせる景観だった。しばらくしてバイカル湖が左側に見えた。連行さ

れる時、車内で湖だ、海だと話し合っていた事を思い出した。海を想わせる如く広大な湖上は一面氷結していた。カンボーイにいつ頃解けるかと尋ねた友に、ニズナイ（知らない）と素っ気ない返事。それもその筈、カンボーイも初めて見る光景だろう。昼夜を問わず走り続けていた貨車は、疲れたようにようやく長い停車をする。

カンボーイより下車命令が出ると一斉に貨車より飛び出す。ここはどこかと尋ねると「ナホトカ」と教えてくれた。アルマアタを出発して十九日目の五月二十五日早朝、待望の最終目的地、沿海地方のナホトカに到着。ウラジオストクという地名は有名なもので知っていたが、ナホトカは耳新しい港街だった。その港街が俄然脚光を浴びるようになったのは、ダモイの乗船地に指定されたことだろう。我々は早速人員を確認される。テント村へ引率され、天幕生活での不安の日々を過ごす。テント村での数日間、毎日昼間は帰国に伴う身元調査、私物検査、散髪等が行われ、夜は共産主義教育並びにインターナショナル（労働歌）の練習を

受け、覚えなければダモイは出来ない、我々の弱点を突いてくる。組の上の鯉の状態だった。

六月一日、人生の想い出に残る一日が始まるようにしていた。雲一つない快晴、まさしく我々の気持ちの如く、晴々とした日だった。昼食後、広場に集められ、出発の号令を合図に、我々は労働歌を合唱しながら丘陵裏側の埠頭を目指して歩いた。頂上まで来ると眼下に埠頭が見え、既に埠頭の広場には整然と幾列にも同胞が並び、乗船を待っている姿が目についた。埠頭まであつという間の距離だった。岸壁には、我々を祖国日本に運んでくれる復員船信濃丸が煙突より微かに白い煙を棚引かせ、早く乗らないかと言いたげに横付けに停泊していた。

夕方近くになり、カンボーイによる最後の人員確認が始まる。総勢二千人くらいだろう。総て乗船準備万端なるもなかなか乗船命令が出ない。早く乗船しないと、とはやる気持ちを押さえながら時の経つのが長くもどかしく感じた事はない。しばらくして待ちに待った乗船許可命令が出る。先頭グループのタラップを上

る後ろ姿を万感の想いで眺めていた。程なくして我々グループの番が来た。気の変わらぬうちに早く乗船しないと、と正直のところ焦りの気持ちがあった。タラップを上るのに足が宙に浮いているような感じだったが、一步一步確認するかのよう上った。タラップを上りきった船上で、船員の方より早速DDTの粉末消毒を受ける。岸壁に目をやると、まだ大勢の同胞が長蛇の列を作り次から次へとタラップを上って来る。

この乗船で我々はソ連での抑留生活にピリオドを打ち、祖国日本に復員したのだと改めて実感した。これから日本に帰ってどんな苦労が待ち受けているか予測はつかないが、あの酷寒のシベリアでの労苦の事を思えばきつと乗り切って行けると自負し、次の瞬間、日本に帰れるという大きな喜びにその不安は完全に打ち消された。文字通り、信濃丸は過去と未来を現在進行形でつなく渡し船だった。夜、信濃丸が岸壁を離れた頃は、安堵感からか知らぬ間に眠ってしまった。

翌朝、「見えたぞ、日本が見えたぞ」と、どこからともなくそんな声が聞こえ目を覚ます。たちまち船内

は大騒ぎ。甲板に出て見ると、遙か彼方の水平線上山並みが朝靄の中にもぼんやりと現わし始めていた。誰に呼び掛けるでもなく「見えるぞ、もうすぐだ」と、今までじっと我慢していた感情を吐き出すように我々は歓呼した。子供のよう無邪気に手を取り抱き合って喜んだ。引揚者で甲板を埋めつくした信濃丸は、海面を滑るように変化に富んだ水路を目的地舞鶴港を目指して進んでいた。刻々と陸地がハッキリ見えるようになる。海岸線に沿って、黄金の波打つ表畑が鮮やかに目に映った。船員の下船準備の指示に従い、順次タラップを下り小船に乗り移る。岸壁から長く延びた棧橋まで運ばれる。棧橋を渡り切り、岸壁とのコーナーの所で自筆にて氏名を書くよう言われ、私は生意気にロシア語で記入した。

舞鶴収容所に到着すると、先ず入浴の指示が出る。身に着けていたすべての物を脱ぎ捨て浴場に入ると、浴槽から豊富な湯が溢れ、室内は湯気でもやもやしていた。早速浴槽に肩まで充分浸り、二年有半のソ連の垢を綺麗サッパリ洗い流した。あくまで本来の目的は

消毒であり、枘状に仕切られた浴槽毎に各種の消毒液が混入され、U字型に配列された最後の浴槽を出ると、上下衣服、下着類をはじめ、靴下、軍帽、軍靴に至るまですべて新品が支給された。割当てられた大部屋にいったん入ったが、日本の現状、郷里の様子を早く知りたくて、建物内をウロウロ歩き回る。日本全土の戦災被害状況が一目で分かる地図が貼り出されていた。被災地は赤く塗り潰されていたが、郷里の方は戦災を免れていたので、早速電報を打つ。

遠きシベリアの地で何度となく夢に見た懐かしの古里の家に昭和二十三年六月六日着く。満州、シベリア、カザフと流転、様々な労苦を体験しながらも幸運にも生還することが出来た喜びは、何物にも替え難いものだった。しかし二度とない貴重な青春時代をソ連の不条理な行為により無意味に消耗した日々の事を考えると、残念でならない。

翻ってみると、満州より望郷の念を抱き続け、東京ダモイを合言葉に労苦に耐え励まし助け合いながら頑張る、その望みも果たし得ず異国の地に埋もれていっ

た同胞の無念さを想う時、生きて帰国出来た幸せに感謝せねばと思った。そして、失意の裡にシベリアの大地で亡くなられた同胞のご冥福を心よりお祈りいたします。理不尽な抑留生活のためいかに多くの犠牲者が出たことか。同じ間違いを繰り返してはなるまいと想う。

【執筆者の紹介】

生年月日 昭和二年十一月二十一日

入隊 昭和二十年四月二十日

部隊名 奉天九二八部隊（文官屯）

職業 軍属、軍人（在満召集）

（神奈川県 相原 貞雄）